

# 幼稚園・保育所における教育と小学校教育の 連携強化による「伝え合う力」の変容

町井 富子\*

## Transformation of the Ability to Communicate by Strengthening Collaboration between Education and Elementary School Education Kindergarten Nursery Schools

Tomiko MACHII

**要旨** 幼稚園・保育所における教育と小学校教育との円滑な接続を図ることの重要性をよりの確に理解し、一貫した教育理念の基「生きる力の基礎を育む」ことができるよう、連携強化の有用性を検証した。幼稚園・保育所において「意図的な言葉かけ」や伝えたい気持ちが高まる体験を工夫した結果を4年間にわたり調査すると、小学校に入学した4月・5月において「伝え合う力」の変容が確認できた。連携の大切さや子どもの視点に立った教育の重要性が確認できると、発達段階を考慮した適切な支援の時期が見えてきたり、教師の指導方針に変化がみられるようになったりした。さらに、「意図的な言葉かけ」が幼児の言葉の発達にどのような影響を及ぼすかについて、3歳児の言葉の変容記録から考察した。

**キーワード**：幼小連携 発達 言葉かけ 伝え合う力 子どもの視点

### I はじめに

平成29年3月31日には、幼児教育としての共通性の確保として「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が同時に公示された。また、幼児教育と小学校教育を貫く柱の確保として「小学校学習指導要領」も同時に公示された。そこでは、幼小の接続の強化をねらいとし、3つの資質・能力によって、幼児教育と小学校以上の学校教育で育成される子どもの力を共通に示した。第1章総則の第2として、幼稚園教育において育みたい資質・能力(1)「知識及び技能の基礎」豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする。(2)「思考力、判断力、表現力等の基礎」気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試

したり、工夫したり、表現したりする。(3)「学びに向かう力、人間性等」心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする。と示し、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿としての方向性・方向目標「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。【(1)健康な心と体(2)自立心(3)協同性(4)道徳性・規範意識の芽生え(5)社会生活とのかかわり(6)思考力の芽生え(7)自然との関わり・生命尊重(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚(9)言葉による伝え合い(10)豊かな感性と表現】<sup>1)</sup>

このように、5歳児修了までに育ってほしい具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化するとともに、小学校と共有することにより、幼小の接続の強化を意図したものと思われる。

\* まちい とみこ 文教大学教育学部非常勤講師

## II 研究の目的

ここ3年間、小学校第1学年の児童の様子を観察し、継続記録をしてみると、第1学年の1割程度の児童が配慮を要する状態である。友達と一緒に並ぶことができない子、話す人の顔を見て話を聞くことができない子、物事に極端なこだわりを持つ子、依頼心が強く一人で自分の椅子に座ることができない子等々である。6歳という年齢であっても、活動の様子をよく見ていくと、3歳児、4歳児のような動きをしている子が多い。そのような現状の中、教師中心の一斉授業が成立しにくくなっている。

そこで、小学校の教師が今までよりも幼児教育に目を向け、一人一人の児童の実態に合わせた学習スタイルや指導方法を考案していく必要がある。

そこで幼・保・小連携により変容した児童の姿から、連携強化の有用性を検証する。

## III 幼稚園・保育所と小学校との連携の効果と3歳児の言葉の変化からの考察

### 【研究1】

#### 1 茂木町の小学校と茂木町の幼稚園・保育所の連携の内容と研究の方法

幼・保・小連携の重要性については、以前から多くの研究者において研究が進められてきている。筆者の勤務していた、栃木県茂木町においても、昭和59年に幼・保・小連絡協議会を設立して以来、研究テーマを決め、毎年小学校と幼稚園や保育所などで公開授業と公開保育を行い、研究を積み重ねてきた。長期間「伝え合う力」の育成を研究テーマとし、意見交換に重点を置き、実践計画の作成を行ってきた。

本稿では特に、平成24年から平成28年3月までの4年間、筆者が校長として勤務していた茂木町立逆川小学校と茂木町の幼稚園・保育所が連携し「伝え合う力」を高める方策を考案してきた内容と、第1学年における「伝え合う力」の変容を中心に検証する。

#### 2 幼稚園・保育所と小学校との連携

茂木町の幼稚園や保育所の幼児は、小学校の行事に参加したり、地域の行事を小学生と一緒に楽しんだりする機会も多い。また、逆川小学校の第1学年

担任は茂木町逆川保育園で2日間の体験研修をさせてもらい、幼児の実態を把握している。さらに、幼稚園や保育所の先生方も小学校の授業を参観し、幼児の成長を確認している。

そこで、思いやりのある優しい子の多い年長児に注目していくといくつかの課題が見えてきた。

◎自分の思いを言葉で話すことが苦手ですぐイライラしてしまう子がいる。

◎遊びの中で、「○○が欲しい。」と友達に言えずに、友達から黙って取り上げてしまうので、トラブルが起きてしまう場面があった。

◎出来事をうまく言葉で表現できず、「やだあ」と泣くだけ。また、「あれがあったよ」「これにのりたいよ」と自分で分かっている物の名前であっても、具体的な名称で話すことが苦手な子が多い。

◎保育者と話す場合でも、「先生痛いよ」「落ちたよ」など、出来事の内容が不明確な話し方をしている子が多い。

◎何か失敗してしまった時「悪かったかな」と思っても「○○ちゃんごめんね」と言えないので、本人の意図に反して喧嘩になっている場面も見られた。

このような状態のまま小学校に入学してくるので、小学校では、学習以前に「自分の思いを相手に伝わるような話し方」から支援していく必要があった。

そこで、小学校の教諭と幼稚園・保育所の先生方が連携し、「伝え合う力」を高めるための具体的な方策を考案し実践した。

#### (1) 研究の方法

幼稚園・保育所の年長児の担任が中心に全職員共通理解の基、1年間以下のような内容に重点を置き3月まで実践した。平成24年度入学の第1学年の様子と具体的な手立てを講じた後に入学してきた。25年度・26年度・27年度を比較する。小学校第1学年の調査は、4月～5月までの2か月間、登校時や休み時間に遊ぶ様子、生活科や図画工作、体育など活動場面の多い教科を中心に実施。

#### (2) 「伝え合う力」を高めるための、幼稚園・保育所における具体的な手立て

ア 家族や友達に伝えたいような感動の体験の

### 位置付け

イ 幼児の視点に立ち、想像力を膨らませるような言葉かけ

ウ 幼児のつぶやき、言葉を共感的な態度で受け止める為の保育者の動き

エ 幼児の心に響く、保育者の表情豊かな話し方

オ 幼児が「認められた」と実感し、喜びの表情が確認できる褒め方の工夫

以上5点の内容を中心に意図的な言葉かけなどをしてきた。

具体的な例として以下に示す。

ア 家族や友達に伝えたいような感動の体験の位置付け(例)

○巨大砂山から水を流して遊ぶなど、ダイナミックな砂遊び

○ウサギやモルモットと1か月間共に生活し、世話をしたり抱いたりする活動

○木をノコギリで切ったり、釘を金槌で打ったりし、簡単な物を作る活動

○杉や檜を輪切りにして作った積み木で遊ぶ活動(地域との連携)

○よく飛ぶ紙飛行機作りや、紙を使ってキリン・ゾウ・バッタなどを作る、少し高度な折り紙に挑戦する。

○同じ遊びに興味を持つ友達と協力しながら長期間遊ぶことができる活動場所の確保(マットやブロック、巨大積み木などを活用したサーキット)

○自分たちが育てたキュウリやトマトを祖父母と一緒に切り、サラダを作って食べる活動。

イ 幼稚園・保育所の幼児の視点に立ち、想像力を膨らませる言葉かけ(例)

○「このマリーゴールドの花の色○○ちゃんの服の色と同じね。マリーゴールドのお花が遊びに来てくれたのね。」

○「あ、あの雲真っ白で綿あめみたいね。ソフトクリームかな」

○「風さんお話ししてるのかな。じっとしてよく聞いてみよう。」

○「アリさん並んでいるよ。アリさんも約束守れるのね。」

○「真っ白な紙が変身したね。ぴよんぴよんカエル

さんね。」「何色のカエルがいいかな？」

○アリジゴクやダンゴムシの住処の近くに行き、「この土の中は魔法の世界です。どんな友達がいるのかな？そっと掘ってみようか？」と声をかけ、虫探しをする。

○自分から調べてみたくなるように、「カタツムリさんはどうやってこの大きな葉っぱから、隣のアジサイの葉っぱに移ったのかな？」と疑問を投げかけ、その様子を見守る。

ウ 幼稚園・保育所で活動する、幼児のつぶやきや言葉を共感的な態度で受け止める為の、保育者の動き

幼児期は、幼児が教師との信頼関係に支えられながら身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚していく。その無意識的な学びをしている姿を教師が捉え、幼児の思いや願いに気付き、一人一人の学びが深まるようにしていく。失敗や困難があっても温かく受け止める保育者がいることにより、幼児は次第に環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして思考錯誤したり、考えたりするようになる。

そこで、幼児の意味不明な「つぶやき」にも耳を傾け、「そうなのね。いろいろなことが分かるのね。」と共感的な態度で受け止めたり、幼児の発する言葉をよく聞き「オウム返し」をしたりしながら、先生が自分と同じ考えであることを自覚できるようにした。

エ 幼稚園・保育所の幼児の心に響く、保育者の表情豊かな話し方・聞き方

○安心感のある笑顔で話す。

○同じ目の高さで、優しくゆっくり話す。

○目を大きく開く、手を動かすなど、幼児が困惑しない程度のオーバーリアクションで話す。

○「すごく大きいトンボ。ほらこんなふう気持ちよさそうに飛んでる。」など、動作を加えながら、自分の喜びが相手に伝わるような話し方をする。

○幼児の話している顔をよく見て、うなずきながら最後までしっかり聞く。

○「そうなのね。先生知らなかった。教えてくれてありがとう。」と幼児が満足するような聞き方をする。

○話すことがとても苦手で、ドキドキしながら話している様子が感じ取れる場合は、そっと手を握りながら聞く。

オ 幼稚園・保育所の幼児が「認められた」と実感し、喜びの表情が確認できる褒め方の工夫（例）

○保護者や祖父母、地域の人等と連携し、得意とすることや自慢したいこと、認めてほしいと思っていることなど、幼児一人一人の実態を把握し、記録しておく。

○「○○ちゃんは割りばしとゴムを使って色々な形のおもちゃを作ることができるのね、すごいなあ。」等と幼児の得意とする活動や言葉を具体的に褒める。

○褒めるタイミングをよく考え、頑張っているその時や、幼児が自分で上手にできたと思っているその時を捉え褒める。

○「○○ちゃんが考えたのね、すごい。」「そのやり方友達にも教えてあげてね。」

○時には、その子の良さを友達に知らせるような褒め方をする。「みんな見て、すごいでしょ○○ちゃんが考えたのよ、こんな素敵に出来上がったよ。」

○大きな声で褒められることを恥ずかしいと思う幼児もいるので、その場その時の幼児の気持ちを第一に考えて、褒め方を工夫する。

○進んで掃除や後片付けができた時等、幼児の見える前で、保護者への連絡帳に「今日のキラキラさんは○○さんでした。途中であきらめず最後まで後片付けをしてくれました。」と書き、家族からも褒めてもらえるようにする。

例を参考に小学校と幼稚園・保育所が連携し幼児の実態を考慮し実践した。

<小学校での調査内容>

茂木町立逆川小学校に平成24年度入学した第1学年の様子から調査を開始した。筆者は「伝え合う力」を以下の10項目と決め、調査を実施。

- ①「おはようございます。」「さようなら。」などのあいさつができる。
- ②自分から友達に「一緒に遊ぼう」などと話しかけることができる。
- ③先生や友達の話聞くことができる。

④友達を誘って遊び「いれて」「かして」「いいよ」など遊びに必要な言葉をスムーズに話す。

⑤自分のやりたいことを友達に話す。

⑥友達に、何をして遊びたいのか聞くことができる。「休み時間に何して遊ぶ」

⑦どんな遊びがいいか、友達と相談する。

⑧戸惑っている友達にやり方を教える。

⑨「先生、トイレに行ってもいいですか？」等と相手に伝えたい内容を最後まで話すことができる。

⑩先生に「ぼくはきのうサッカーの練習が夜まであったので、宿題を忘れてしまいました。」など、理由を付け加えて話すことができる。

以上の⑩の項目について朝の登校時、2校時の休み時間・昼休みなどを活用し、①「おはようございます。」と最後まで言えたら、1点、友達が教室に入って来たとき、「○○ちゃんおはようございます。」と言えたら1点と決め、①から⑩までの項目について4月に10日間、5月に10日間、名簿に「正の文字」を書きながら点数を付け記録した。以下の表はその一部である。

表1 ①～⑩の内容が確認できた数

氏名	4月12日 (名簿に記入)	4月の合計
町井富子	①正正正正正 ②正正正 ③正正正正 ④正正 ⑤正正正 ⑥正正 ⑦正正 ⑧正 ⑨正正 ⑩正正	① 325 ② 185 ③ 243 ④ 126 ⑤ 215 ⑥ 121 ⑦ 113 ⑧ 78 ⑨ 198 ⑩ 138
○○○○		
○○○○	以下略	以下略

4月末までの合計点数と5月末までの合計点数を確認し比較検討した。(表1)

次に、「+の変容について確認できた」①～⑩について、基準点をそれぞれ100点と決め、5月の合

計点数が基準点の100点を越えた人数を確認し、平成24年度と連携強化をしてきた実践後の25年度・26年度・27年度までを一覧表にすると、以下のような人数となった。(表2)

平成24年度第1学年 21名入学  
 平成25年度第1学年 22名入学  
 平成26年度第1学年 11名入学  
 平成27年度第1学年 16名入学

表2 基準点100点を越えた子の数

年度 入学者	24年 21人	25年 22人	26年 11人	27年 16人
100点を 越えた人数 ①	15	22	11	16
②	6	22	10	16
③	18	22	11	16
④	8	22	11	16
⑤	7	20	10	15
⑥	6	20	11	16
⑦	5	21	11	15
⑧	5	21	9	14
⑨	6	22	10	15
⑩	7	21	10	15

### (3) 結果と考察

幼稚園や保育所の保育に携わる教職員全員が同一歩調で、上記ア～オまでの項目において重点的に配慮してきた結果、25年度も26年度も27年度も「伝え合う力」の変容が確認できた。(表2) また、下記のような様子も見られた。

- ◎友達と一緒に動く楽しさを味わうことができている。
- ◎友達と一緒に歌ったり、体を動かしたり、遊んだりすることにより、友達への親しみを感じている様子がみられる。
- ◎学級全体で遊ぶ楽しさに気付いている子が多くなった。
- ◎先生や友達など誰とでも自分の思いを伝えられる子が多くなった。
- ◎自ら進んで活動し、できるようになるまで頑張る子が多くなった。

- ◎自分の思いを言葉で話すことができるようになると満足し、友達どうしのトラブルが少なくなった。

#### 【研究2】<家庭生活を中心として>

次に「伝え合う力」が育ち「自分の思いが正しく相手に伝わる」話し方ができるようになった要因が、担任やその子とかかわる保育者の「意図的な言葉かけ」によるものなのかを検証するため、言葉を覚える段階にある3歳児を対象とし、検証した。

- 1 意図的に「安心感のある言葉かけ」をしてきた3歳児(A児)と、普通の家族の会話の中で過ごした3歳児の「言葉の変容」を比較。

<家族構成が同じ2つの家庭で生活する3歳児を対象に、比較考察する。>

#### ア A児の家族構成

A児、3歳(対象児本人)は5歳の姉、8歳の兄と3人兄弟の末娘である。基本的には、父親・母親と5人家族であるが、同じ敷地内の別邸に、祖父母が住んでいるので、祖父母との会話もある。平日は朝7時から17時30分までは毎日保育園で生活している。保育園から帰宅後は3人兄弟と母親と過ごす時間が長い、父親の帰宅時刻は20時頃である。

#### イ B児の家族構成

B児も5歳の姉と8歳の姉の3人兄弟の末の男子である。基本的には、父親・母親と5人家族であるが、A児と同じように敷地内に祖父母が住んでいるので、土曜日や日曜日は祖父母との会話もある。A児と同じ保育園に登園していて、平日は7時から17時30分まで、保育園で過ごしている。B児の父親の帰宅時刻は19時ごろである。母親との会話も多いが、父親も子どもたちとの会話を楽しんでいる姿をよく見る。

この2組の家族は保育園や小学校も一緒、母親どうしは中学校の同級生ということもあり、家族ぐるみで楽しむことが多い。A児の家によく遊びに来るので、その様子を観察させてもらうことにした。

#### ウ A児の言葉に関する家庭環境

A児の家族では「正しく話せる子にしたい」という願いを込め、長男が生まれてから以下のような「意図的な言葉の環境づくり」に心がけてきた。

- ①名前を呼ばれたら必ず「はい」と返事をする。

- ②家族全員「おはようございます。」と声を掛け合う。
- ③食事の時は「いただきます。」「ごちそうさまでした。」と言う。
- ④学校や会社に行く時や帰宅時には「行ってきます。」「ただいま。」と言う。
- ⑤間違えた時は「ごめんなさい。」と言葉できちんと謝る。
- ⑥感謝の気持ちを表現したい時は「ありがとうございました。」と言葉できちんとお礼を言う。

A児が生まれた時期には、この①～⑥については家族全員が習慣となっていた。

#### エ B児の言葉に関する家庭環境

B児の家族もあいさつも返事もよくできる家族である。特に長女は誰とでも話すことができ、コミュニケーション能力が高い。父親・母親を含め全員がいつも相手の立場や気持ちを考え思いやりがあり、温かい雰囲気のある家族である。

そこで、ほぼ同じ家庭環境の中で過ごすA児・B児を対象とし「意図的な言葉かけ」が3歳児の言葉の発達にどのように影響するのか、ブロック遊びにおける言葉を中心とし調査をしてみた。

#### 2 ブロック遊びを中心とした言葉・会話の変化を確認するための調査方法及び、調査結果

平成19年8月、A児、B児がブロック遊びをしている様子を観察した。二人の話す言葉を聞いていると、「あったよ」「ママ」「パパ」「これ」「あれ」「だめ」「わたしの」など、ほぼ同じような話し方であった。

そこで、A児の母親だけに「意図的な言葉かけ」を依頼した。毎日の生活中で「あれ取って」ではなく、「黄色のブロック取って」など、自分の思いが正しく相手に伝わるような話し方ができるように「優しい言葉かけ」をしてもらうことにした。

具体的な名称などを加えて最後まで話すことができた言葉（+の話し方）を1点とし、その数を数えた。

平成29年8月～平成30年7月までの結果（表3）を考察し、A児とB児の会話を比較すると「意図的な言葉かけ」をしたA児のほうが「自分の思いが伝わる話し方」ができるようになっていた。また、誰

に出会っても「おはようございます。」と言うことができ、「黄色いブロック取って」など具体的な物の名前などを加えた話し方ができるようになっていた。

表3 +の話し方が確認できた数

調査日	A児 +の話し方	B児 +の話し方
① 8月20日	1	1
② 9月24日	2	2
③ 10月15日	3	2
④ 11月19日	5	3
⑤ 12月17日	5	3
⑥ 1月21日	7	3
⑦ 2月18日	10	4
⑧ 3月18日	11	4
⑨ 4月22日	12	5
⑩ 5月20日	15	6
⑪ 6月17日	15	7
⑫ 7月22日	16	8
合計	102	48

#### IV 研究結果からの考察

##### 1 幼稚園・保育所と小学校の連携強化からの考察

幼稚園・保育所における教育から小学校教育への円滑な接続が図れるよう、連続した指導計画や連絡体制の整備に組織的に取り組んだ結果、幼児期から児童期の子どもの発達や学びの連続性を捉えることができ、今回のような具体的な調査が可能となった。上記調査結果からも明らかのように、子ども一人一人への「適切な言葉かけ」は幼児・児童の「伝え合う力」の育成に不可欠であることが明らかとなった。また、教職員同士互いの良さに気付くことにもなった。

ここで、平成27年に茂木町立逆川小学校で「伝え合う力の育成」をねらいとし、国語の授業公開をしてくれた、1年担任の山口恵子氏の言葉を紹介する。

「『伝え合う力の育成』は本校の1年生だけでなく、どの児童にもあてはまる重要な課題であるという思いをもって、意欲的に取り組むことができた。

自分がミドルリーダー的存在の年齢となり、これまでの経験だけに頼って無難に学習を展開してしまいがちだが、幼・保・小の教職員と協議をする中で、指導方法についての模索や教育への情熱を再確認する機会となった。保育を参観することで、幼児期の発達がよく分かった。入学してくる児童は初めから1年生になれるのではなく、幼児期からのつながりがあるのだ、と実感した。今まで、『早く小学生らしく』『どうして〇〇ができないのだろう』などと、児童の思いを考えず自分本位の指導をしがちで、思い通りに反応しないと、いらいらしたりもした。そんな自分を恥ずかしく思い、大いに反省する機会となった。幼稚園・保育所の教職員が一人一人に愛情を注ぎ、大切に保育してきた思いを忘れず、入学してきた児童が明るく安心して小学校生活を営めるよう支援していくことが1年担任の大きな努めだと感じた。(2015年8月17日(月) 栃木県・日本教育新聞掲載) このように連携が深まるごとに、自分の教育観を見直し、保育や発達に応じた望ましい授業の在り方を追究していくようになった。

小学校教諭は自分の指導観を変えることが苦手である。しかし、幼稚園や保育所の先生方と連携を深め、子ども一人一人の実態を捉えた子ども中心の教育の大切さに気付くことができたのである。

そして、小学校の授業においても教え込むのではなく、子どもの思いを大切にしたい、ボトムアップの教育<sup>2)</sup>ができるようになったのである。

## 2 意図的な言葉かけによる3歳児の「言葉の変容」について

調査結果(表3)からも明らかのように、3歳児であっても、母親を中心とし、「意図的な言葉かけ」を継続すると、「自分の思いが伝わるような話し方ができるようになることが分かった。

## V まとめ

子ども一人一人が、自分の思いを友達に伝えることができ、満足した状態で毎日を過ごすことができたいと願い、幼稚園・保育所と小学校との連携を進めてきた。子どもの変容が確認できるようになると「学びの連続性」についても協議するようになり、カリキュラムの検討や遊びを重視した子ども中

心の支援の仕方にも目が向けられるようになってきた。そして、教師の指導観を変えるきっかけにもなった。嶋野道弘氏も就学前教育と小学校教育との連携は教育全体を改善する取り組みの一環である<sup>3)</sup>と述べているが、まさにそれを実感した取組となった。

さらに、3歳児の変容の結果からも言えるように、母親を中心とした「家族の温かい言葉かけ」は子どもの心を安定させ「自分の感動を誰かに伝えたい、話したい。」と思う気持ちを高めることにもつながることが分かった。今後も家庭生活との関連を重視した幼稚園・保育所と小学校との連携の在り方について研究を深めていきたいと考える。

## 【引用文献】

- 1) 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領(2017年3月31日文部科学省告示第62) フレーベル館、Pp.28
- 2) 奥井智久(1994) 新しい学力観に立つ「生活科の指導と評価」教育開発研究所(1994) Pp.258
- 3) 嶋野道弘「学びの美学」東洋館出版(2016) Pp.361

## 【参考文献】

- 嶋野道弘「学びの哲学」「学び合い」が実現する究極の授業 東洋館出版社(2018) Pp.262
- 無藤 隆「幼児の心理」『新しい幼児教育の原理と展開』第一法規(1991)
- 木村吉彦「育ちと学びをつなぐ『幼保小連携教育』の挑戦」「実践接続期カリキュラム」茅野市教育委員会ぎょうせい(2016) Pp.184
- 文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方についての報告」幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 2010年11月11日 Pp.30
- 林 信二郎、梅澤 実「まなごしの保育理論」みなみ書房(2009) Pp.143
- 梅澤 実、佐々木 晃「幼児教育『言葉』の領域における保育者の言葉の教材化の視点」鳴門教育大学研究紀要 第23巻(2007)
- 倉橋惣三『育ての心』『倉橋惣三選集』第三巻 フ

レーベル館（1965）pp.28～35

加納誠司「幼児期から児童期への学びを連続的につなぐ交流活動の在り方」愛知教育大学 生活科教育講座「生活科・総合的学習教育研究」pp.11～20（2013）Pp.248

文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説「生活編」（2017年7月文部科学省告示）東洋館出版社 Pp.140

厚生労働省 保育所保育指針（2017年3月31日厚生労働省告示 第117号）（フレーベル館）Pp.39